

令和 6 年 6 月 21 日現在

機関番号：35410

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2021～2023

課題番号：21K00882

研究課題名（和文）中世社会における製鉄・鍛冶職能集団の活動実態の解明と中世製鉄技術に関する研究

研究課題名（英文）A study of activities of iron manufacture engineers and ironware craftsmen and iron manufacturing technology in the Middle Age

研究代表者

安間 拓巳（Amma, Takumi）

比治山大学・現代文化学部・教授

研究者番号：40263644

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,200,000円

研究成果の概要（和文）：安芸北部の中世鉄生産の技術や歴史的背景、鉄生産を行った製鉄職人（集団）の活動実態を、小見谷遺跡群の発掘調査の結果と出土遺物の化学分析調査および文献史料から窺える同地域の領主層の動向と関連づけて考察した。製鉄遺跡は近隣の吉川元春館跡との関連を想定し15世紀末～16世紀代と予想していたが、放射性炭素年代測定の結果14世紀代まで遡ることが判明した。このことから、吉川氏が厳島神社領であった志路原荘内のこの地域を早い段階で領有したのは、この地における鉄生産を掌握するためであったと想定された。また検出された製鉄遺構は石見南東部に類似例があり、製鉄職人の動向を明らかにするための重要な事例となった。

研究成果の学術的意義や社会的意義

製鉄遺跡の発掘調査では新たな調査例を加えることとなり、安芸北部地域ならびに中国地方西部における鉄生産の歴史や技術の解明につながる成果を得ることができた。遺跡の年代が14世紀頃と判定されたことで、調査を実施した遺跡が所在する地域が13世紀中頃に厳島神社へ納められていた「三角野村の鉄」の生産地に関連する可能性が浮上し、荘園公領制下における鉄生産の様相を知る上で重要な手懸りを得ることができた。また検出された遺構と類似したものが石見地方南東部でも確認できたことで、両地域をまたぐ形で活動する製鉄職人（集団）の存在が想定され、中世における鉄生産の操業形態の一端を推定できるようになった。

研究成果の概要（英文）：In this study, I examined the activity actual situation of the iron manufacture craftsman (in a group) and a technique of the iron production and its historic background, in the middle Ages in northern Aki. Because of the connection with the Kikkawa Motoharu site located in the neighborhood, the generation of iron manufacture remains expected it with the from the end of 15th century to 16th century, but it became clear to date back to 14th century as a result of measurement in the radiocarbon dating. From this, it was assumed that the reason why Kikkawa possessed this area in Shijihara-so belonged to Itsukushima Shrine at an early stage was that they wanted to held the iron production in this area. In addition, the detected iron manufacture remains of an ancient structure had an example similar to the southeastern part of Iwami, and it was an important example to clarify the trend of the iron manufacture craftsman.

研究分野：考古学

キーワード：中世鉄生産 製鉄職能集団 製鉄遺跡

様式 C - 19、F - 19 - 1 (共通)

1. 研究開始当初の背景

これまで中世の職能集団の生活形態や領主権力との関係については、主に古文書や絵巻物などの歴史史料から検討が行われてきた。一方、考古学におけるこれまでの中世製鉄遺跡の研究は製鉄遺跡・遺構の構造やその時間的变化、製鉄技術の解明、近世たたら吹製鉄との関連などに重点が置かれ、製鉄作業を行った職人たちとの関連から研究されることは少なかった。しかし、職能集団の操業実態や地域の領主権力と職能集団との関係性の解明は、中世社会を理解するうえで重要な作業であり、そのためには文献史学と生産技術等に関する具体的な資料が得られる考古学、両分野からの検討が必要であると感じていた。

本研究は、広島県山県郡北広島町に所在する国史跡吉川元春館跡の西方約1kmの所を流れる小見谷川流域に展開する小見谷製鉄遺跡群を対象とする。北広島町域の旧豊平地区では、中世の製鉄関連遺跡が220ヶ所以上確認されている。なかでも小見谷遺跡群では製鉄関連遺跡が20ヶ所以上確認されており、立地や地形などからすべてが中世のものと推定されている。そして一方、遺跡群に近接する吉川元春館については、その建設時に関する古文書が残されており、その中に「わなみのかち(和浪の鍛冶)」と呼ばれた鍛冶集団の存在をうかがうことができる。そしてその居住地は、現在残る地名の検討から、小見谷川の下流域に推定されている(木村2001)。さらに、中世段階では製鉄集団と鍛冶集団が十分に分化していなかった可能性も考えられることから、彼ら(鍛冶集団)が川筋に展開する製鉄遺跡を営んだのではないかという想定も可能である。これらのことから、小見谷製鉄遺跡群と中世の鍛冶集団とを関連付けることができると考えた。

また近世たたら吹製鉄の成立に関しては、近年中世製鉄遺跡の調査例が増加した島根県や岡山県域での調査・研究成果をもとに、中世の製鉄技術から近世たたら吹製鉄への移行について、その道筋が説かれるようになってきた(角田2014・2019)。ただし、近世たたら吹製鉄の成立を解明するためには、中国地方全域における中世製鉄遺跡の状況の把握が重要なのであるが、広島県域では中世製鉄遺跡の発掘調査事例が約20年にわたってほとんど無く、調査研究が隣接諸地域から大きく遅れている。したがって、現在中世の製鉄技術と近世たたら吹製鉄との関連については、旧来の広島県内の知見に基づいた形で説明されているのだが、それでは不十分であることは明確であり、たたら吹製鉄の成立を考えるうえで広島県域での新たな資料による調査・研究が不可欠である。

以上のように、中世の製鉄・鍛冶集団の操業実態や、地域の領主権力との関係、また広島県内における中世製鉄遺跡研究の活性化の契機として、小見谷製鉄遺跡群の調査研究が必要である。

2. 研究の目的

- ・考古学の手法を用いて、中世の一地域で活動した鉄・鉄器生産集団の生産技術や操業実態および生活文化を明らかにするとともに、遺跡の構造や分布などと文献史学の研究成果とを併せ、中世社会における地域の領主権力と職能集団との関係を解明する。
- ・隣接地域に比べて研究の立ち遅れが目立つ、広島県における中世製鉄遺跡の構造や製鉄技術の解明、および近世たたら吹製鉄の成立過程に関する調査研究を推進するため、中世製鉄遺跡に関する新たな知見を蓄積し、それにもとづき現在の研究成果を検証する。
- ・研究成果をもとに、一地域における中世の歴史的景観の復元を行うことで、歴史的遺産を活用した地域振興の取組を創造・推進するという社会貢献につなげる。

3. 研究の方法

広島県北広島町に所在する小見谷製鉄遺跡群と吉川元春館跡を主な研究対象として考古学的・理化学的な調査・研究を実施するとともに、歴史史料に見える鉄・鉄器生産集団の様相とも併せて、彼らの活動実態や領主権力との関係について考察する。

4．研究成果

安芸北部の中世鉄生産の技術や歴史的背景、鉄生産を行った製鉄職人（集団）の活動実態を、小見谷遺跡群の発掘調査の結果と出土遺物の化学分析調査および文献史料から窺える同地域の領主層の動向と関連づけて考察した。

製鉄遺跡の年代は近隣の吉川元春館跡との関連を想定し15世紀末～16世紀と予想していたが、放射性炭素年代測定の結果14世紀代まで遡ることが判明した。遺跡群が所在する地域には12世紀後半から厳島神社領の志路原荘が設置されていたが、13世紀後半頃以降安芸北部を拠点とする吉川氏が次第に神社領を蚕食し、15～16世紀には完全に領有化する。その過程で、遺跡群が所在する地域は14世紀後半には吉川氏の支配下に置かれたことが文献史料から分かっている。このことから、吉川氏が厳島神社領であった志路原荘内のこの地域を早い段階で領有したのは、この地における鉄生産を掌握するためであったと想定された。

また検出された製鉄遺構は、大きく見れば安芸北部から石見島南部に見られる型式であるが、細部において特徴的な部分がある。この点については安芸北部では今のところ類例がないが、石見南東部には類似例が確認されている。このことから、製鉄職人が国境や領主層の支配領域を越えるかたちで移動し、操業を行うことがあった可能性を示唆しており、中世における製鉄職人の動向を考える上で重要な事例となった。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 0件）

1. 著者名 安間拓巳	4. 巻 766
2. 論文標題 中世社会における製鉄・鍛冶職能集団の活動実態の解明と中世製鉄技術に関する研究	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 考古学ジャーナル	6. 最初と最後の頁 32～35
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計1件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 安間拓巳
2. 発表標題 広島県山県郡北広島町カミシヨウブ第1号製鉄遺跡の発掘調査
3. 学会等名 たたら研究会
4. 発表年 2023年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 （共著）安間拓巳	4. 発行年 2024年
2. 出版社 高志書院	5. 総ページ数 -
3. 書名 （仮題）瀬戸内の中世2 生産と流通	

〔産業財産権〕

〔その他〕

安間拓巳「石見・安芸の中世の鉄生産」『しまねの古代文化』第31号、島根県古代文化センター、2024（講演記録）

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------